

三

四国制覇の挫折と豊臣大名化

織田政権と元親

土佐一条氏を推戴する「御所体制」は元親にとってさまざまな点でリスクであり、織田政権との関係においてもそうであった。ここでも秋澤繁氏の研究に導かれつつ、「御所体制」の存在をふまえて織田政権と元親との関係についてみておこう（秋澤「織豊期長宗我部氏の側面」）。

織田信長に仕えていたことがある太田牛一おおたうしかずが著した『信長公記』しんちやうこうきには、元親に関する一見不可解な記述が存在する（天正八年六月二十六日条）。ここでは、陽明文庫本を底本とする角川文庫版『信長公記』から、その読み下し文を引用してみよう。

（前略）土佐国捕佐せしめ候長宗我部土佐守、惟任日向守執奏にて御音信として御鷹十六聯もと、并に砂糖三千斤進上。（後略）

ここにみられる「捕佐」は、角川文庫版『信長公記』の脚注によれば、南葵文庫本では「輔佐」となっている。『日本国語大辞典第二版』をひいてみると、「捕佐」という項が確認できないのに対し、「輔佐」については「補佐・輔佐」の項が確認される。よって、南葵文庫本の「輔佐」という表記が正しいと考えられるものの、そうだとした場合、「土佐国」を「輔佐せしめ候長宗我部土佐守」とはといったどう

*

『信長公記』

一六一〇年

頃に成立したと考えられる信長の伝記。「のぶながこうき」とも読み、『信長記』などの別称もある。正確な記事が多く、史料としての評価は高い。

いう意味であろうか。『日本国語大辞典第二版』では、「輔佐」について「たすけおぎなうこと。付き添って力を添えること。また、その役やその人」と説明されている。これを参考に問題の部分を意識すると、「土佐国の支配をたすけおぎなわせている長宗我部元親」となる。ならば、元親は土佐国の支配を「たすけおぎなう」地位にあり、その上位に何らかの存在が想定される。それは元親が「御所体制」で推戴する一条内政にほかならないであろう。さらに、「せしめ」という使役的・命令的な表現に着目するならば、織田政権は単に「御所体制」を承認していたのではなさそうである。むしろ、織田政権は四国制覇を進めていた大名長宗我部氏を服属・臣従させるために、土佐一条氏の支配を「輔佐」する武家にすぎない不完全な大名と位置づけようと企図していたと考えられているのである。

以上、秋澤氏の研究に導かれつつ、『信長公記』の記述について説明してきた。「御所体制」をふまえると、問題の一見不可解な部分はむしろ長宗我部氏の実像に関する貴重な証言であるといえる。さらに、元親の名字との関連でみた『多聞院日記』の記事で「土佐の一条殿の内一段武者なり」と述べられているのも納得がゆこう。元親をあくまで土佐一条氏の「武者」にすぎないとみなす認識が示すように、土佐一条氏を推戴する「御所体制」は織田政権の対長宗我部政策に利用されてしまうという点でもリスクだったのである。

織田政権への服属・臣従といった観点からすると、『信長公記』の続く記述も注